

### HDVカメラZ1J 6台で 千葉県内のイベントや祭りを取材

番組は取材VTR主体で構成されている。取材テーマは学生たちで決める。これまで放送されたものは千葉の自然や行事、生涯学習、地元の公共機関、千葉の高校生の活動など地域に密着したもの。情報大ステーションは昨年7月から12月まで放映されたが、地域密着ということもあり、地元の方からの反響も大きかったという。取材カメラはソニーのHDVカメラ、Z1Jを情報大で6台用意。3台ずつ使用することで2班が動くことができる。レポーターは、関わりのある高校生が主に担当。



取材

スタジオ収録



### 東京情報大学の バーチャル スタジオで スタジオシーンの 収録

スタジオシーンは、番組の冒頭と、VTRの合間、そして最後にある。情報大生がメインキャスターとなり、レポーターを勤めた高校生が報告役として座る。スタジオは情報大学を所有するバーチャルスタジオ。ブルーバックを背景に撮影し、CGと合成処理をする。第12回放映の富里すいかロードレースの回では、すいかをスタジオで食べるシーンも。



レポーター、ミキサー、スイッチャー……。番組制作のすべてを学生が勤めるという試みは、おそらく日本初（世界初？）ではないだろうか。統括しているのは、千葉市にある東京情報大学情報文化学科の映像ゼミを担当する、伊藤敏朗先生。映像ゼミに参加する3年生を中心に運営されている。千葉県内の高校生はレポーター（取材役）として登場、地元の祭やイベントなどを体当たりで報告する役目だ。取材テーマは学生たちで決める。千葉県内のイベントや施設、活動など地域密着の話題を選ぶ。それをレポーター形式のビデオとしてまとめ、その担当レポーターがスタジオに出演して、取材時の逸話を語りながら、紹介するという形式。スタジオシーンは生放送ではないが、初挑戦の学生が一朝一夕でできることではないだろう。統括の伊藤先生にしても、映像制作の経験は豊富だが、テレビ現場での体験はない。映像教育の一環とはいえ、一体全体どうして、伊藤先生はこんな大変なことを企画したのだろうか。

# 千葉県内の 高校生と大学生が テレビ番組を作ってるって ホントなの？



12月24日まで  
毎週土曜日  
午後10:15～  
放映

### 千葉テレビで放送される「情報大ステーション」番組日程

第1回	勇壮! 和良比はだか祭り～四街道市～	2005.7.2放映
第2回	支えあう心 介護福祉用具体験授業～県立佐倉南高校 じりつ時間～	2005.7.9放映
第3回	伝統の響き 木更津基句～県立佐倉南高校 じりつ時間～	2005.7.16放映
第4回	復活した農村歌舞伎～大栄町大須賀神社 伊能歌舞伎奉納公演～	2005.7.23放映
第5回	妖怪大戦争に大潜入!～情報大生が超話題の映画に大挙エキストラ出演!～	2005.7.30放映
第6回	先生が演じる・生徒がささえる～コモンセンスカンパニー・高校演劇部顧問の先生たちの演劇集団から	2005.8.6放映
第7回	伝統の町並みを愛して～佐原の町並み保存とボランティア活動～	2005.8.13放映
第8回	軽便蒸気機関車復活運転～成田ゆめ牧場 羅須地人鉄道協会～	2005.8.20放映
第9回	SWING! SWING! SWING!～富里高校ジャズオーケストラ部と米国ハワード大学生との夢の競演～	2005.8.27放映
第10回	菜の花から考える環境問題～菜の花エコプロジェクト 旭市菜の花まつり～	2005.9.3放映
第11回	壁に挑む! 高校生たちのスポーツライミング～千葉工業高校山岳部～	2005.9.10放映
第12回	1万人超が走るおいしい大会～富里すいかロードレース～	2005.9.17放映
第13回	ネパールに届ける高校生の心～市川工業高校生のネパール研修記～	2005.9.24放映

↑12回までの放送済み番組を掲載。12月まで毎週土曜日10:15から放送。

## ど

うせ裏方でプロがばつちりサポートしてるんでしょ、と思った人、ハズレです。千葉のUHF放送千葉テレビで放映されている15分番組「情報大ステーション」は真正正銘、大学生たちが授業の一環として、番組制作を行っている。企画立案から取材交渉、シナリオ作成、取材、編集のみならず、スタジオ収録時のキャスター、カメラマン、ディ

実際に放映された番組を  
見てみましょう

第12回  
1万人が走るおいしい大会  
~富里すいかロードレース~  
2005年9月17日放映



↑取材した当日は、富里すいかロードレースの回を収録中。すいかの名産地である富里では、給水所にすいかを用意したロードレースが開催され大盛況。富里高校の陸上部の二人が腰にビデオカメラを装着して、レースに参加。女子高校生のインタビューに参加者も顔が緩む。



必ず  
モニターで見て  
カメラ写りをチェック



↑番組は16:9のレターボックスで収録。スタジオカメラは4:3だが、テレビ側に黒帯を貼って画角を確認。  
↑実際にテレビで見て髪型がおかしいかを入念にチェック。



←一回ごとにディレクターは交代する。リハーサルでの指示出し、OKテイクかどうかの判断はディレクターが行う。的確な指示を出すのは案外難しい。

ディレクターさん

シナリオだって  
どんどん直します

→リハーサルしながらセリフのおかしいところ、キャスターの言いにくい部分は直していく。イントネーションも正していく。



後は  
ノンリニア  
編集に  
まかせます



DVデッキに収録

←家庭用のDVデッキに収録。タイムコードを書き入れ、OKテイクには印をつけておく。バーチャルスタジオの抜き具合もチェック。

いると思います」  
ビデオ作りを支援する小誌にとっても大問題だと思います。「そうした状況に風穴をあけないですよ」  
そう力強く言う。  
番組はプロの眼から見れば、完璧な出来とは言えないだろう。しかしプロが作るものとは何かしら違う視点やノリがあるのを視聴者が感じ取り、こういう番組があってもいいと思ったとしたら、ひとまず成功ではないだろうか。そして、ここで番組制作を体験した人が、社会に出て映像による情報発信に挑戦していくことによって、時代が動き出すのかもしれない。

## レポーターとスタッフが素人で、どうして番組ができる？ 情報大・伊藤先生が考案したテクニックを紹介しましょう

私が考えました



東京情報大学  
伊藤敬朗先生

←シナリオはディレクター役の学生がまず書き、それから伊藤先生も参加して推敲を重ねる。採用されたのは第3稿。VTRを流しているシーンにも台本があり、VTRを見ながらスタジオで音声だけ収録する。

シナリオを熟考し、  
吟味を重ねる



画はダミーで  
シナリオを  
読み合わせる

←テレビ番組は尺を厳密に合わせる必要がある。そこで、このシナリオで時間内におさまるか検証するために考えたのがこの方法。スタジオの画はダミーをはじめ、実際にシナリオを読み合わせながら、時間を計ってみる。



シナリオを見ながら収録

↑カメラマン、フロアディレクター、ミキサー、すべての人がシナリオを確認しながら収録に臨む。ちなみにスタジオのカメラは3カメ。

アンチョコ係

カメラ目線画はプロンプター



↑カメラ目線のカットの場合は、プロンプターに原稿を映し出す。キャスターは手元のシナリオに目を落とすことはない。

目線の先にシナリオ  
(拡大版)を置く

これがアンチョコだ



←レポーター役の高校生がキャスターに向かって話す場合は、プロンプターを見ることができないので、目線の先にセリフを書いたアンチョコが掲げられている。高校生を出演の直前にシナリオを渡されるが無難にこなす。

なぜ「情報大ステーション」を始めたのですか？  
「情報メディアのデジタル化ということは言われてますよね。その流れのひとつとして、これまで放送局などに独占されていた映像メディアが、これからは一般市民や学生が自分たちで撮影し、パソコンで編集し、電波やネットワークを通じて自由に情報発信できるようになり、そのことが地域社会のあり方までも変えていく、といった未来予想がよく語られたものでした」  
「でも、これまでアマチュアが制作する映像が、多くの人々の目にふれるように発信され、社会的反響をよぶといった現象はほとんど起こったことがないんです」  
はつきり言いますね(笑)。  
たしかにそうです。  
「実際の映像番組の制作は、技術面や人材面など、越えなければならぬハードルがいくつもあつて簡単じゃないんです。かけ声の高さとは裏腹に、市民や学生が映像メディアを通じて情報発信するなどということは夢物語にすぎないのではないかと、という冷めたムードも拡がって